

(A01-3) 骨格筋の発達・維持萎縮における負荷依存性の分子基盤の理解

研究代表者 瀬原淳子

京都大学再生医科学研究所 教授

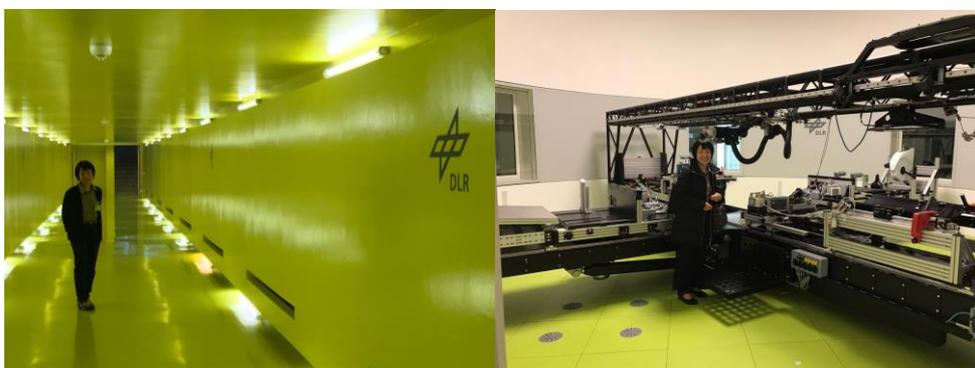
平成 29 年 3 月 13 日 (月) ～ 平成 29 年 3 月 24 日 (金)

2017 年 3 月、国際支援を受けて、ドイツ・フランスを訪問した。

私たちの新学術「宇宙に生きる」の国際連携として、ヨーロッパとの連携を強化する目的、これまでの共同研究を展開する目的、そして新たな共同研究を模索する、と言う 3 つの目的に基づいて、次のような研究拠点を訪れた他、発生生物学に関する日独合同学会に出席した。

(1) ドイツ航空宇宙センター **Deutsches Zentrum für Luft- und Raumfahrt (DLR)**

ケルンを拠点とするドイツの宇宙開発を担う政府機関で、欧州宇宙機関 (ESA) と密接なつながりを持つ (註: JAXA と DLR は、2018 年 2 月 戦略的連携のため機関間協定を締結した)。今回は、その中であって、我々の研究上最も関連がある **The DLR Institute of Aerospace Medicine** を訪問し、ドイツでの宇宙医学・生物学研究の現状、我々の新学術研究の紹介と、共同研究・連携の可能性に関する話し合い、研究所の施設見学、などを行った。もっとも印象に残るのは、建物・施設が立派であったことである。写真は、静まり返った閉鎖環境施設 (DLR のマークが見える)、そして部屋いっぱいの遠心装置で、顕微鏡や人を遠心することができる装置 (写真 2) である。若手・学生のインターンシップなどを通じて交流を強化しよう、と言う結論となった。個人的にも、小型魚類を用いて耳石を研究している Ralf Anton 博士に耳石研究や技術について伺うことができ、大きな収穫であった (写真 3 は、宿泊地ケルンのシンボルである大聖堂。夜も見学することができた)。





(2) マールブルグ大学 Philipps-Universität Marburg での講演とディスカッション

マールブルグ大学は 500 年近い伝統を誇り、第一回ノーベル生理学・医学賞を受賞したベーリング (Emil Adolf von Behring) が教授をしていた由緒ある大学である。自らの講演の後、招待して下さった、炎症細胞の挙動制御に関する共同研究者 Juerg Barstch 教授や近傍の研究室の研究者らと密なディスカッションをすることができた。さらに講演会に出席しておられたスイスで活躍する宇宙科学研究者 Cora Thiel 博士を紹介していただくことができた。写真は Barstch 教授と、彼に連れて行ってもらったお城とそこに置かれた赤いハイヒールのモニュメントである。マールブルグは、グリム童話で有名なグリムを輩出したことでも有名で、このモニュメントもそれを象徴するもの。



(3) 学会出席 日独発生生物学会ジョイントミーティング (北ドイツの港町 Kiel にて開催) に出席し、神経筋シナプス形成に関する発表と、関連情報の収集を行なった。

(4) 共同研究者訪問

最後に、パリパスツール研究所 (Institute Pasteur) を訪問し、共同研究者、酒井大史博士 (現愛媛大学 助教) と筋幹細胞に関するディスカッションを行なった。

全体として、大変有意義な国際研究交流を行うことができた。